

K I D S

D E S I G N

A W A R D

2 0 1 9

キッズデザイン
コンセプトブック 2019



KIDS
DESIGN
AWARD

子どもたちのために、 次なるステップへ ～受賞後のストーリー～

キッズデザイン賞はこれまで13回の開催で延べ3000点近い作品が受賞している。
13年の年月で、子どもと子育てを取り巻く環境も大きく変化した。
これまでの受賞作品も日々、進化、変化しており、本特集は受賞後のその後を追った。
ひとつだけ言えることは、キッズデザインに取り組む思いは変わらない、ということだ。

[FEATURE]

1

里山がもたらす健やかな育ち

里山風景になじむ木造平屋の建物が印象的な幼稚園である八王子市の「東京ゆりかご幼稚園」。子どもが主体的に環境と関わり、自然、環境から食農、労働といったテーマを一体に捉えた教育は、ESD(持続可能な開発のための教育)に代表されるグローバルな取り組みにつながるものとして、2016年度に最優秀賞を受賞した。その後の活動について、東京ゆりかご幼稚園の園長、内野彰裕さんは語ってくれた。「施設としては、2歳児を対象とした小規模保育所を2019年4月にオープンしました。既存園舎につなげる形で里山の斜面に向かって増築しました。その後も、里山の環境や四季の移ろいに沿った保育、行事が広がりを見せています。保育に必要な遊びの道具や教材の多くは、里山の中から見つけてくることができます」。

ESDプロジェクト「里山教育」がユネスコに認められ、2018年には「ユネスコスクール」の認定を受けた。ESDを通じて、地球市民としてのグローバルな価値判断ができるよう、日々の保育の中で実践を深めているという。「里山教育の成果だと感じられることはとてもたくさんありますが、あえて言えば、里山の四季の流れの中で、大らかに育っていることでしょうか。毎日一緒に生活していると当たり前のことになっていますが、ちょっとやそつとのことでへこたれない、たくましさ、しなやかさ、心の豊かさが備わってきていると感じています」。

家族とともに育ちあう場として

変化を見せているのは、園児だけではない。その家族にも影響をもたらしているようだ。「園行事や活動へのご家族の参加意識が高まったと思います。幼稚園の活動や環境にご家族が関わって下さることは子どもの育ちにとって、とても大きな意味があると感じます。毎月土曜開催の保護者の会『鉄腕クラブ』では、里山の保全や園庭整備を行っていますが、参加される保護者の皆さんも、年々、環境や循環への理解が深まっているようです。また、みんなで子どもたちを見守る、という雰囲気も自然と醸成されてきたように思います。これは里山の『人を優しく包み込む環境』が、そうさせているかも知れません。また、鉄腕クラブの活動の集大成として、秋祭りという行事でお父さま方が『ゆりかご戦隊 里山レンジャー』という劇を披露して下さるようになりました。毎年、里山の環境や循環がテーマで、子どもたちも楽しみながら学んでいくことができるようになりました。里山環境は、子どもだけでなく、家族が育ち合う場なのでしょう」。



里山の自然を五感で感じられる園舎



小規模保育園「森のゆりかご」



鉄腕クラブで大人も学びあう

[FEATURE]

2

所有不動産の活用で 子育て環境の向上を

企業による地域の子育て環境向上へ向けた動きはさらに活発になっている。第一生命保険株式会社は、全国の保有不動産を活用したCSV取組「保育所誘致による待機児童1割解消プロジェクト」で2015年度の奨励賞を受賞した。

2011年から保育所運営会社と連携し、全国に保有する不動産物件を活かし、保育所誘致に取り組んでいる。受賞当時、13施設、650名ほどだった受け入れは、現在、30施設、1600名近くにまで拡大した。第一生命保険株式会社不動産部の渡辺隆文さんは、その後の進展についてこう語ってくれた。

「2016年には、中野区野方の当社保有ビルに学童保育を併設した認可保育所を誘致しました。待機児童問題の解決に寄与するとともに、慣れ親しんだ場所で放課後を過ごしてもらえるので安心感もあるようです」。

独自の取組として2018年から「シェア園庭」を開始した。「世田谷区と協定を結び、烏山にある当社グラウンドを、70以上ある近隣の保育所に園庭として開放しました。保育所の増加とともに保育の質の低下も懸念されるため、できることがないかと考えたものです。都心にありながら森に囲まれた広い場所で遊べるので、皆様に喜んでいただいています」。

最近では職員向け保育所も4施設開設され、不動産活用から社会課題解決を目指す、「人を考える」会社としての役割を着実に進めていると感じた。



レイモンド中原保育園
©有限会社 栗原写真事務所 栗原宏光



レイモンド汐見丘がくどうクラブ

3

子どもたちと共創する街づくり

埼玉県入間市。米軍ハウスを改修し平成ハウスに建替え、子どもが50人以上住み、子育てをしながら家族の夢を叶えられるまちに生まれ変わった「JOHNSON TOWN」(2017年度・優秀賞)。17年前までは、高齢化・老朽化した子どもが一人もおらず、閑散としていた街が大きく生まれ変わった。その後、街はどのように変化を遂げたのか。設計に携わった渡辺治建築都市設計事務所の渡辺治さんはこう語る。

「千葉大工学部の松浦研究室が居住者からストリート名を募集しストリート名が決まり、ストリートにサインを設置しました。また、同大学が駐車場をマルチな広場として使う居住者の親子参加のワークショップを開催し、それを受けて、その部分の駐車場を廃止し、親子があそべる恒常的な広場とすることが決まりました」。

2018年11月2日から7日まで、千葉大学とタウン(磯野商会)共催で「JOHNSON TOWN PARKLET WEEK」を開催した。期間中は、パークレットとして、ジョンソンタウン内の駐車帯の一部に人工芝、ベンチ、テーブル、椅子などを設置し、滞在空間として活用したり、タウンベンチとして、ジョンソンタウン内の屋外空間にベンチを設置し、休憩スペースとして活用したりした。ウェイファインディングでは、ワークショップで検討した、ジョンソンタウン内の通りの名前を表記した看板を設置した。子どもたちは、路上ペインティングワークショップで、路上にチョークでアートを描き、来街者のクルマの進入を抑制する試みを行なった。「受賞後、視察者、来訪者は増えました。大学の研究室による見学、調査、論文も増えています。横須賀基地の跡地を検討している自治体、世田谷区、埼玉県など、自治体による見学者や意見交換の機会が増えました」。

多様な人々が暮らすコミュニティを目指す

進化を続けるコミュニティとして、JOHNSON TOWNは今後どこへ向かおうとしているのか。渡辺さんは語る。「タウンは、街づくりの方向性として今後、子ども、高齢者、障がい者など多様な居住者が楽しく住み、それぞれのライフステージに伴ってタウンの中で移住して、楽しく住み続けることができるまちを目指しています。タウン内では障がい者が住むアパートがすでにあり、現在、タウンから100mくらい離れた街道沿に平成ハウスタイプの福祉施設を建設しており、運営者は地元の社会福祉法人です。そこと連携して障がい者の居住・就労支援などに力を入れていきたいとも考えていて、草刈りや清掃などの業務委託も始まっています」。



平成ハウスタイプの福祉施設も誕生する



路上ペインティングで安全で楽しい道づくり



ワークショップを通じて子どもが街をデザインする
All photos by ©2014-2018 森田敏士



多様な人々が集う街づくりを目指していく

4

次々と届くユーザーからの感謝の声

情報の受発信の中心がスマートフォンになり、そのサービスも多様化している。特に周囲に相談相手がないなど、子育て層の孤立防止に向けて、ICTは欠かせないものになった。

「母子健康手帳アプリ」(2017年度・優秀賞)は毎年、アップデートされコンテンツが追加されており、需要は高まっていると感じているという。NTTドコモの吉村香織さんは言う。

「私たちがキッズデザイン賞を受賞したのは2年前ですが、自治体や病院からの導入希望や問合せが増え、利用先は合わせて400件以上となりました。ユーザー様から多くの声をいただきますが、一例として、『出産関連で不安なときにこのアプリはほしい言葉をかけてくれたし、日々変わる赤ちゃんからのコメントを通してお腹の子に愛着を持たた』『役立つ情報の提供や、日記管理目的で始めたこのアプリがまさか精神的に支えてくれるとは思っていませんでした』など、妊婦や育児中の皆様本当に大事に思ってもらえるアプリになったことを実感しています」。



妊娠、育児期の知りたいことや不安に寄り添うコンテンツ

5

相談件数の増加や専門家のメリットも

ベビーカレンダーアプリ(2018年度・優秀賞)も、サービスがさらに進化した。株式会社ベビーカレンダー メディア事業部の井上治さんは語る。

「アプリの月間利用者数にしましては、この1年で約2倍となりました。サービス、コンテンツ別では、助産師、管理栄養士にいつでも無料で相談できる専門家相談サービスの成長が顕著で、月間の新規相談件数がこの1年で約4倍となり、需要の高さを改めて感じます。専門家相談サービスでは、サービスの向上のため、この1年で回答者である専門家の人数を約3倍に増員しています。最近では、相談内容がより多様化しており、利用者から『専門家を選びたい』『即時回答して欲しい』といった声も増えているため、今後は専門家のプロフィール情報や過去の回答履歴、回答までの期間などを掲載し、利用者自身が状況や相談内容に合わせて最適な専門家へ相談できる仕組みの構築を考えています」。

小児科オンライン(2017年度・優秀賞)はそのニーズの高さに驚いているという。株式会社 Kids Public 川畑朱里さんに聞いた。

「2年前より会員数は約5倍になりました。利用者からは、アンケートで『小児科オンラインで相談できたおかげで、早いタイミングで受診することができました。結果、早期の発見・治療に繋がることができ本当に良かった』『初めての発熱で、不安が募っていましたが、分かりやすく丁寧にお話していただき不安が取り除かれ、落ち着いて家で様子を見ることができました』などの声がありました。また相談を対応している医師からも、『普段診療している現場でそのような相談者からの声を聞ける機会は少ないため、相談者の力になれてうれしいことはもちろん、自身のコミュニケーションスキルの研鑽にも役立つ』といったオンラインでの取り組みならではの魅力を感じてもらえているように思います」。

コンテンツはさらなる広がりを見せ、同社が目指す産前産後の切れ目ないケアを実現するために、2018年に産婦人科医・助産師を中心として女性の健康を包括的にサポートする「産婦人科オンライン」をリリースした。こちらもキッズデザイン賞を受賞。安心で使いやすい妊娠・出産・子育てのサポートの展開がますます高まりを見せている。



相談内容の変化に合わせて、最適なサービスを提供してくれる



子育て層と医師、双方がその魅力を語っているサービスだ